

昔々、イブ・ナッシュヤという非常に悪知恵の働く男がいて、彼はその手練手管で若者たちの憧れの的だった。彼は仔山羊のいる一頭の山羊を持っていた。それは、コモロのスルタン時代のことで、スルタンたちは皮膚が白かった。彼らは、我々の先祖のものを好き放題に我が物とし、奪っていた。それは長い間続いた。

スルタンは、2頭の仔山羊がいるイブ・ナッシュヤの山羊のことを聞きつけた。彼は人を遣ってイブ・ナッシュヤの家で仔山羊を探した。スルタンは、仔山羊の父親は自分の所有物だから、仔山羊は自分に戻されるべきだと言い張った。雌はひとりでは仔を産めないからだ。イブ・ナッシュヤはこの知らせを聞いて驚いたが、承諾して答えた。

「スルタンには逆らえません。都合のいい時に仔山羊を探しに来てください」。

スルタンは金曜日に、担がれた椅子に座って町を散策するのが常だった。このようにして、彼は気に入ったものすべてを自分のものにしていくことが出来たのだ。イブ・ナッシュヤはスルタンのこの習慣を知っていた。彼はおばあさんの家で色々なものを探しに行き、それから道に座り込んだ。

13時頃、アザーンの後、住民たちは通りすがりにスルタンに挨拶をしたが、イブ・ナッシュヤは他のことに気を取られて挨拶しなかった。当惑したスルタンは、イブ・ナッシュヤが何故、挨拶するために[やっていることを]やめないのか尋ねた。

「イブ・ナッシュヤ、お前は何をやっているのだ？ どうして私に挨拶するためにそれをやめないのだ？」。

「ああ、スルタン様、どうもすみません！ 私の父親が出産したばかりなので忙しいのです！」。

「お前の父が出産したと？」。

「はい、ちょうど産んだところです。だから彼の世話をしなくてはいけないのです」。

「イブ・ナッシュヤ、スルタンをからかうのはやめなさい。いつから、男が産むようになったのだ」。

「そうしたら、もし男が産まないということにあなたが同意するなら、私に仔山羊を返して下さい。仔山羊を産んだのは私の雌山羊であってあなたの雄山羊ではないのですから。それから、我々に他の山羊も返して下さい。どうやって雄が仔を産むのかわかりません。」

住民たちは、自分たちの仔山羊を取り戻し、スルタンは自分の雄山羊と共に残された。